

マーガレット・バラの語る幕末日本

戸田 徹子

Margaret Ballagh's *Glimpses of Old Japan 1861-1866*

TODA Tetsuko

Abstract

Margaret Ballagh came to Japan in 1861 with her husband James Ballagh, missionary of the Dutch Reformed Church of the United States. She published a book named *Glimpses of Old Japan 1861-1866* in 1908. This book is a collection of the letters which she sent to her close friends at home during her first stay in Japan. They show her fresh and genuine response to Japanese people and society. Encountering the turmoil of the last days of the Tokugawa Shogunate, Margaret also gave her own analysis of politics and international relations. This paper surveys the contents of *Glimpses of Old Japan 1861-1866* and points out the distinct features of Margaret's observation about old Japan.

キーワード：マーガレット・バラ アメリカ女性宣教師 『古き日本の瞥見』 幕末日本

Key words: Margaret Ballagh, American female missionary, *Glimpses of Old Japan 1861-1866*, the last days of Edo period

はじめに

幕末から明治初期に来日したアメリカ女性宣教師たちの著書において、日本はどのように描かれているだろうか。女性宣教師たちはキリスト教文明の優位性を謳いあげ、日本に異教の無知と闇と迷信を見出す視座を共有していたと言われている。しかしながら彼女たちの記述には微妙にニュアンスの異なる点がある。これは来日時期、来日時の年齢、未婚・既婚・未亡人の違いや、出身階層、それまでの経験や職歴の違いから生じたと思われる。前号ではジュリア・カロザースの *The Sunrise Kingdom* (1879) を紹介し、その特徴として次の3点を指摘した。ジュリアは異教と異教国の非文明性を非難する立場にありながら、少なくとも初期の段階では日本に強い魅力を感じており、その評価にはブレが生じていた。また読者層を海外伝道の女性支援者とその予備軍である子供たち

に限定し、女性たちの興味対象を詳細に描き、さらに一部フィクションを交え子供の生活を通して日本社会を説明するなどの工夫を凝らしている。最後に、類書に見られない特徴として、女性宣教師たちが海外で直面する問題やアメリカの支援者・支援母体との関係から生じる問題を率直に語っていることも指摘した。¹⁾ 本稿では時代を少し遡り、幕末期に日本に滞在していたアメリカ女性宣教師の著作である、Margaret T. Ballagh, *Glimpses of Old Japan 1861-1866* (1908)²⁾ を取り上げる。

1. *Glimpses of Old Japan 1861-1866* (1908)

著者であるマーガレット・バラ (Margaret Tate Kinnear Ballagh, 1840~1909) は宣教師夫人として1861年に来日した。夫のジェームズ・H・バラ (James Hamilton Ballagh, 1832~1920) はオランダ改革派の宣教師で横浜バンドの指導者とし

て日本プロテスタント伝道史に大きな足跡を残した人物である。ここで夫婦について紹介しておく。ジェームズはニューヨーク州ホバートの農家に生まれた。父親が知人の借金の保証をしたために地所を失い、バラ一家はニューヨーク州内とニュージャージー州内を転々とした。一家は大家族で貧しく、この間、ジェームズは断続的に学校教育を受ける機会はあったものの、主に商売をして家計を助けた。ロックランドでジェームズはオランダ改革派教会に加わり、宣教師となる決心をした。20歳の時(1852年)にラトガーズ大学に入学し、卒業後、ニューブランズウィック神学校に進学した。神学校在学中にS.R.ブラウンの日本伝道に関する講演を聴き、これが契機となりジェームズは日本伝道を志した。ジェームズの日本伝道への重要な貢献は2つある。一つは1865年に、自分の日本語教師だった矢野元隆に日本で始めてプロテスタントの洗礼を受けたことであり、もう一つは、1872年に日本で最初のプロテスタント教会である横浜公会が設置された際、その仮牧師に就任したことである。³⁾ 前者については本書においても詳述されている。

高谷道男によれば、ジェームズは「宗教的情熱の人」で「横浜バンドの源流」だった。同じく横浜バンドの指導者でも、J.C.ヘボンとS.R.ブラウンが高い学識を誇っていたのに対し、ジェームズは商人だったので人に接するのが得意だった。彼は行動的で、多くの日本人青年に慕われた。新しい学問を求めて横浜に集まる若者たちにジェームズは英語を教えて、時にキリスト教の話をしていたところ、彼らから祈禱会を開いてくれるように求められ、さらにこれがリバイバルに繋がって、日本人による最初のプロテスタント教会が組織されるに至った。これが横浜公会であった。さらに、ジェームズの伝道活動は関東地方ばかりでなく信州地方や静岡地方を中心に、新潟、名古屋と広範囲に及び、日本基督教会発展に大きく寄与したと言われている。⁴⁾

一方、妻であるマーガレットに関する情報は少ない。わずかに知られているところでは、彼女はヴァージニア州出身。一人娘で3歳のときに父親

を、6歳で母親を亡くしている。しかしながら祖父の資産を相続し、経済的には恵まれていた。いかにもお嬢様育ちであったとも、才色兼備だったとも伝えられている。⁵⁾

マーガレットは1861年から1866年まで日本に滞在した後、いったん帰国し、4年後に再来日した。本書は第一期目の滞日経験を新鮮で感情豊かな筆致で描いている。出版社は東京のMethodist Publisher Houseである。タイトル・ページに“*For the Author*”と記載されていることから、商業ベースで市販されたのではなく、私家用印刷物だったと思われる。サイズはA5版程度で、126ページの小型本である。この本は1908年に出版されたわけであるが、マーガレットによれば、もともとは友人たちに宛てた手紙で、40年前の宣教師家族の日常生活を記録したものにすぎないという。数年前に病気で自宅に引きこもっているときに、これらの手紙を集めて子供たちのために保管しておいた。この手紙のことはすっかり忘れていたのだが、つい最近、古いトランクから見つかり、親しい友人に読んでもらったところ、子供対象の本を書いた経験のある一人の友人から若者たちの間に海外伝道への関心を喚起するためにも出版すべきだと勧められた。マーガレットは自分もビルマ伝道にあたったアドニラル・ジャッドソン夫人などの宣教師たちの手紙を読んで伝道活動に興味を持つようになったことを思い出し、伝道活動支援になればと考え出版を決意したと経緯を語り、本書を通してアメリカの若者たちが日本に興味をもってくれたら嬉しいと述べている。⁶⁾

公開を予定していなかった私信を40年後に出版するにあたっては、取捨選択がなされたと推測される。このような資料的な限界があるとはいえ、女性が記した幕末日本の記録は希少で、本書はアメリカ女性が残した幕末期の記録として、少なくとも書籍としては唯一のものだろうと思われる。そればかりでなくマーガレットが来日した頃はまだ日本に関する情報や文献は少なかったであろうから、彼女は比較的、先人の評価に惑わされることなく、見たままの感じたままの印象を記録したことが期待できる。

本書は1861年から1865年までの手紙を網羅しているが、分量としては1861年と1862年のものが紙面のほぼ4分の3を占めている。バラ夫妻には1862年6月26日に長女キャリーが生まれており、これ以降は手紙を書く時間的な余裕が無くなったのであろう。

2. 時代背景

バラ夫妻が来日した1861年は南北戦争が勃発した年だった。両親を亡くしていたマーガレットは母親代わりの伯母の下で育てられていたが、まさにマーガレットの結婚の日(1861年5月15日)に、この伯母は自分の兄弟を戦場に送ったという。戦争の成り行きを案じながらの出発となったのである。夫婦が日本に向けてニューヨークを出帆したのは1861年6月1日だった。所要日数が3週間程度ですむ日本—アメリカ間の太平洋横断ルートはまだ普及しておらず、バラ夫妻の航海は大西洋、アフリカの喜望峰、インド洋、東シナ海を経由する6ヶ月にも及ぶ船旅で、神奈川に到着したのは11月11日だった。航海中にジェームズは29歳の誕生日を迎え、来日後まもなくマーガレットは21歳になった。最後の上海—横浜間の航路を除くと、この間、マーガレットにとって船旅は総じて楽しいものだったようだ。インド洋上でスコールにあったとき、マーガレットは船長が止めるのも無視して、甲板に残りそれを観察しようと企む。ここには好奇心旺盛で“rebellious creature”であるマーガレットがいる。同時に彼女は思慮深い女性でもあった。友人や親族に心配をかけまいと考えたのであろうか、彼女は最初の頃の手紙では危機的な時期に故郷を離れなければならない気持ちを語ってはいない。彼女が“almost heart-crushing”だったとその思いを吐露したのは、母国を後にして1年以上たった1862年9月になってからのことだった。⁷⁾ マーガレットは本当に寂しいとき辛いときでも、それには触れず、あえて楽しい話題を探そうとする。手紙からは明るく前向きでありながら、思慮深くもある性格がうかがえる。

日本もアメリカと同様に変革の時を迎えていた。ペリーの浦賀来航は1853年のことであり、翌年

に日米和親条約が調印された。1858年には日米修好通商条約が結ばれたが、同年中にオランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様の修好通商条約が調印され、神奈川・長崎・箱館・新潟・兵庫が開港場となった。この条約では踏絵禁止が明記され、居留地内において信教と礼拝の自由が認められた。これに伴い開港実施後の1859年から1860年にかけてアメリカから宣教師たちが続ぎまに来日を果たした。1859年には聖公会のJ.リギンズとS.W.ウィリアムズが中国伝道から日本伝道に転じ、長崎に到着した。長老派のJ.C.ヘボンは神奈川に、そしてオランダ改革派は長崎にG.F.フルベッキを、神奈川にS.R.ブラウンとD.B.シモンズを派遣した。さらに1860年にはアメリカ自由バプチスト伝道協会のジョナサン・ゴープルが神奈川に到着した。バラ夫妻の来日はこれに続くものだった。

バラ夫妻が来日した1861年というのは尊皇派と攘夷派が幕府と鋭く対立していた時期であり、日本の国内政治は混乱を極めた。宣教師たちはようやく日本における政治の二重支配構造に気づき始めた。外国との関係では、同年にアメリカ公使館通訳ヒュースケンが殺害され、翌年には薩摩藩士によりイギリス商人リチャードソンが切り殺されるという生麦事件が起きる。後に、マーガレットはこの生麦事件の現場を通りかかることになる。バラ夫妻は先着の宣教師たちが滞在していた神奈川の成仏寺に迎えられ、妻が帰国中だったヘボンの家に間借りした。外国人はいずれも幕府の監視下に置かれており、とりわけ女性であるマーガレットは日本語教師や使用人、八百屋以外の日本人と接触する機会はほとんど無かった。彼女は気晴らしに遠出することもままならいと嘆いている。⁸⁾ 1869年に来日するカロザース夫人が横浜から東京に転居し、箱根や静岡、はたまた京都まで旅行していることと比べると、この1860年代前半はまだ外国人の行動範囲は限定されていた。太政官布告により、切支丹禁制の高札が撤去されたのは1873年だった。来日を果たしたものの、宣教師たちは閉ざされた環境の下でまず日本語の学習を開始した。

ヘボンは成仏寺時代の単調な生活をしきりに嘆いていたが、⁹⁾ なかば幽閉された環境のもとで宣教師たちの結束は固く、成仏寺での生活は穏やかで美しいものだったと伝えられている。成仏寺ではヘボンが本堂に、ブラウンが庫裏に住み、1860年4月にきたゴープル一家は境内に小さな小屋を建てて生活した。まだバラ夫妻が到着する前のことであるが、深川商人の喜左エ門が成仏寺を訪れた際には、ヘボンの部屋にブラウンとゴープルの子供たちが集いピアノや歌を披露し、ミシンの実演もしてくれたという。子供たちにお土産の下駄をプレゼントしたところ、大はしゃぎでこれを履いて部屋の中を飛び回ったというエピソードが記されている。成仏寺は横浜に住む欧米人たちの憩いの場となっていた。日曜日にはヘボンの住まいである本堂で礼拝会が持たれたが、これには信者が横浜から小船に乗ってやってきて、教派の別を超えプロテスタントの人々が集った。横浜に駐在する人々の多くは単身者で、タウンゼント・ハリス公使も含め、成仏寺の平和で家族的な雰囲気惹きつけられた。¹⁰⁾

マーガレットは1862年9月7日の手紙で、故郷の人たちを安心させるためもあったのだろうが、連れ合いにも恵まれ幸せで、宣教師生活の試練にいつ遭遇するかいぶかしい程だと語っている。成仏寺での生活は拘束されてはいるものの、多少の不便はあったとしても、この時点では志を共にする仲間と穏やかに生活していた。¹¹⁾

3. 宣教師夫人という立場

マーガレットの来日前の経歴やバラと知り合った経緯は不明であるが、日本派遣は急遽決まったようだ。マーガレットはこんなに早く異教地に赴くことになろうとは考えておらず、“It certainly does seem strange to be here, and I often wonder if 'I am I.' ”と日本にいることを自分でもいぶかしく感じていた。¹²⁾ マーガレットはあくまで宣教師の夫人として伝道地に赴いたのであり、最優先すべきは家庭であった。それゆえ伝道活動については野心を持っておらず、時に日本語習得がはかばかしくないことや、伝道の機会に恵まれ

ないことを嘆きはしても、それが大きなストレスにはならなかったようだ。

前述のように日本人との接触が限られていた環境で、宣教師たちはまず日本語学習に時間を費やした。ヘボン宅では同氏とバラ夫妻が同じ部屋でそれぞれの日本人教師について三者三様に日本語を学習していたが、本書にはその様子が描かれていて微笑ましい。¹³⁾ またヘボンからの受け売りかもしれないが、日本語についてかなり詳しい説明が散見する。女性と言語の関係にも言及していて興味深い。¹⁴⁾ いずれにしても、これはマーガレットの日本語への関心の反映であろう。

しかしながら1862年6月に長女が誕生すると、マーガレットは日本語どころではなくなる。赤ん坊は伝道意欲を削ぐ存在であると次のように述べている。

Babies make sad havoc of missionary aspirations. Why, I expected to have a parcel of little ragged children around me, teaching them by this time; but I have not looked into a Japanese book for three months. I was beginning to read the character pretty well before baby came...

今頃はボロ着の子供たちに教えていたはずなのに、漢字もかなり上手に読めるようになっていたのにとマーガレットは嘆く。とはいえ彼女は外向きの、日本人対象の働きだけが伝道活動だと思っていたわけではない。ホームを整え、宣教師たちの来訪に対応することも主婦の大切な仕事だと自覚していた。宣教師夫人は単身宣教師や避暑で日本にやってくる中国駐在の宣教師を接待した。日本に着たばかりの頃は何がなんだか分からなくて傍観しているだけだったが、今では現地の事情にも精通し役に立つようになった。赤ん坊も誕生し、彼女は自分の重要性を感じ始めていると記している。

I begin to feel my importance too, for I know that if I can be of no other use in this land, I can at least make a home for

new missionaries who are coming in. Besides our own family, we have made a home for three young men and two missionary families from China, during the last year.

育児と下宿人の世話に時間が奪われるのを嘆きながらも、一方では将来日本で活躍するためにもマーガレットはこつこつと日本語を学び続けていた。¹⁵⁾

1863年1月にマーガレットは夫とともに日本人家庭を訪問し始める。これとて相変わらず家事や育児などに追われながらだった。日記を見ると、いかに日常の些事に時間が取られているか分かったと記している。そして夫とともに日本人家庭を訪問したが、もっと自由に日本語を操れるようになりたいと嘆く。

With new servants, no cooking stove, and three young men to board, my time is quite taken up in house-keeping and attending to baby. A chronicles is useful in this respect, if no other, that we may see how much of life is taken up with little things, though I mean to try to do something with the language this winter and prepare myself for future usefulness here. I seem on the threshold of the very kind of usefulness I have nearly all my life longed for, and I so ardently desire the honor of doing something for these poor people, gathering a few sheaves before I die. Yesterday P.M. I called with my husband, on some of the people, and had a trial of our conversational powers. Oh! for more liberty in this tongue.

日本人宅では火傷しそうなほど熱いお茶を出されたり、煙草を勧められたり、洋服を隅々まで調べられたりといったエピソードが紹介されている。不愉快なこともあっただろうに、マーガレットの筆にかかるといかにも楽しそうに聞こえるのが不

思議である。¹⁶⁾

本書を読む限り、マーガレットの場合、夫婦は仲むつまじく、他の宣教師たちとの人間関係も良好だったようだ。とりわけヘボンへの信頼は厚く、夫妻は次女のみドルネームをヘボンとしたばかりでなく、マーガレットは本書をヘボンに献呈している。¹⁷⁾ また成仏寺での他のアメリカ宣教師家族たちとの暮らしは楽しく穏やかで、近隣の日本人との関係も上手くいっていた。このような安定した家庭環境と人間関係が自分の生き方を肯定的に捕らえる姿勢を育んだ。前号で取り上げたジュリア・カロザースの場合は、子供が無く、女子教育にエネルギーを傾注しようとした。しかし夫が宣教師仲間から疎まれ、そのせいもあって彼女の伝道活動の進展が阻まれた。最終的に夫婦は宣教師を辞め、ジュリアは夫を日本に残し帰国した。これは夫婦関係の破綻と伝道活動の挫折を意味した。¹⁸⁾ ジュリアと比較すると、マーガレットは長女、次女（アンナ、1864年5月生まれ）に恵まれ、内助の功に徹し、地味ながらも重要な仕事を担っており、それが彼女の誇りともなっていた。

4. 日本との出会い

当初から、マーガレットの日本に対する評価は好意的なものだった。これには彼女の中国体験が関係していたかもしれない。バラ夫妻は東シナ海を航行し廈門、上海を経由して横浜に到着したのであるが、日本行きの船を待って上海に3週間ほど滞在せざるをえなかった。マーガレットは現地の宣教師たちと交流を深めるとともに、学校、視覚障害者用施設、中国の結婚式、仏教寺院などを見学して過ごした。マーガレットによれば、上海は絶望と苦悩の町だった。死を目前にした乞食たちが路上に倒れ、野原や川の土手のあちこちには塚や小屋、むしろ（こも）を被せた箱があって、死者が葬られていた。これらは墓と呼ぶにはお粗末なもので、ちゃんと埋葬されていないので時に犬が死体を荒らすほどだったという。悲惨さはこれに留まらず、もう一つ、異教の悪習の最たるものとしてマーガレットは纏足を紹介する。中国では上流階級の女性たちは幼い時から足を縛られ、

自由に歩行できないようにされた。手の込んだ美しい絹の衣装をまとった女性たちは、障害者にされて、人の手を借りてよたよた歩かざるをえない。マーガレットは中国女性たちに最大限の同情を示し、異教の偏見と習慣がいかに人間の心と魂を狭量にするかと語っている。¹⁹⁾

上海での見聞があるからこそ、日本で異教のもたらす絶望や悲慘を失くさなければとマーガレットは決意を新たにす。成仏寺に来てすぐに書いた日本からの最初の手紙で、彼女は日本の自然の美しさに言及し、日本人が決して野蛮ではなく親切で礼儀正しく、知的であることを報告し、自然の美しさに異教のゆがみや道徳的荒廃を忘れてしまいそうになると書いている。

The people are by no means savage but kind and courteous, intelligent and progressive. Is it strange, under these circumstances that one could forget the deformities of heathenism and the moral desert into which one goes, in the first sight of such luxuriant beauty, and be proud to call it *home*? Then come with me over seas and across oceans while I attempt to interest you in a land that is bright and beautiful, yet knows that its moral condition is lost in the mists of childish superstition.

日本は “the ignorance, distress, poverty and filth” (無知、絶望、貧困、不衛生) がない分まだましだが、“the haughtiness, bigotry, and conceit” (傲慢、偏狭、うぬぼれ) が蔓延している。とはいえ貧困や不衛生は目に見える敵であるが、「傲慢、偏狭、うぬぼれ」の実態は現実に日本人と接触しなければ解説できない。自然は美しいが、道徳的には腐敗しているとマーガレットは繰り返し強調するのだが、日本人と接触する機会がない限り、腐敗の具体的な有様は語れないでいる。²⁰⁾ 言葉を換えれば、精神的闇を論じるほど日本人との親しい付き合いはなかったであろう。

日本での暮らしぶりを知らせて欲しいという友人に対し、マーガレットは1862年9月7日の手紙で、自分の文章力では東洋の特異性・独自性を語れないと次のように述べる。

When you marry that missionary and come out to the East to live, you will understand the difficulty of painting a picture of Eastern domestic life for Western eyes to appreciate. To speak plainly, I lack the power to paint to you things are they really exist. We breath a different atmosphere from yours; its peculiarities are not transferable---at least by my pen, and I only speak of them that you may know missionaries are not exempt from them and how they are lifted above them. If I attempt to present them, they fall in distorted shapes on your vision. ²¹⁾

自分は表現力が乏しいからというのはマーガレットの謙遜であろう。東洋の雰囲気は極めて特異で、それは文章で伝えられるものではない。無理を承知で描こうとしても、歪曲した形でしか伝わらないというマーガレットの異文化を語るのに慎重な姿勢は、アメリカ女性宣教師たち多くが理解できないことは異教の闇と迷信として描いた姿勢と好対照をなす。マーガレットは来日後に21歳の誕生日を迎えた。彼女はまだ若かったがゆえ宣教師的な偏見からは比較的自由で、異文化に対して受容的な態度を有していたと思われる。

前述の通りバラ夫妻は成仏寺に居を定めたわけであったが、“A Buddhist temple is not the worst place in the world to initiate one to life in a heathen land.” (異教国で生活を始めるのにお寺も悪くない。) と語っている。しばらくすると航海の疲労や天候のせいかもしれないが、異教的なものに対して憤りを感じられないと嘆き、自分の倫理感覚が異常なのだろうかと問うている。さらに来日して4, 5ヵ月後には、ブラウンがバラ夫妻の住居候補として確保してくれた寺を訪ね

た。結局、あまりにも異教的な装飾やシンボルが多いので、ここを借りることはなかった。しかしながら、このような家にすらある種の美を感じてしまうとマーガレットは言い、自分の好みはちょっと変だから、自分は文明化していない国にこそ相応しい人間だと述べる。²²⁾ マーガレットは異教の建物や装飾に違和感をもってはいるのだが、それを攻撃はしない。それどころか共感すら抱いているようだ。

東洋のものは総じてとても魅力的だと 1862 年 9 月の手紙には記されている。鄙びた古寺の彫刻や意匠ですら素晴らしいのだから、日光などはどれほど壮麗であろうかとマーガレットは想像をたくましくする。²³⁾ その後、彼女は鎌倉の大仏を見る機会に恵まれた。この時、マーガレットは大仏の大きさに圧倒され、畏敬の念を感じずにはいなかった。彼女は次の感想を記している。

We stood viewing it from this distance and thought there would be more reason in idolatry if what were worshiped, were always as impressive as this. An old priest came and invited us to go nearer. In standing beneath it, I felt my own littleness as never before, and acknowledged to some degree of awe and reverence to such a masterpiece of human art!

信仰対象にはなりえないとしても、芸術品また建造物としては、これを賞賛せずにはいられなかった。とはいえ賞賛したまま手紙を閉じるわけにはいかず、マーガレットは “In the presence of such an image I realized that it is only by the grace of God that we are not all idol worshipers, for that is the inevitable tendency of the human heart.” と神のおかげで自分たちが偶像崇拜に陥らずにすんでいることを感謝するのである。²⁴⁾

マーガレットは神道にも温かい視線を送っていた。護衛たちが傍らに神社を見つけ思わず手をあわせた姿をみて、何か崇高なものを感じたと彼女は記している。²⁵⁾ かといって、これは彼女がこれ

らの異教を容認していたことを意味しない。というのも多くの箇所では彼女はキリスト教伝道の必要を強調しているからである。さらに同じ寺でも川崎大師に対しては華美だけで空疎であると否定的な反応を示している。²⁶⁾ 少なくともこの時点では、心を許した故国の友人に、マーガレットはむしろ直感的に感じたことを率直に述べていただけないかもしれない。

5. 日本の女性と子供

マーガレットは日本の自然、建造物、人々、言語、風習について紹介しているが、日本人と日本社会へのまなざしは一貫して温かく、キリスト教や西洋文明の視点から断罪するようなことはない。日本の庶民の生活ぶりには何か聖書に出てくる情景を思い出させるものがあり、懐かしい気がする」と述べ、老夫婦と長男夫婦という家族構成の類似性を指摘するとともに、とくに衣装のゆったりとした感じが似ていると説明する。しかしながら日本の着物は西洋人たちにとっては、むしろだらしがないという印象のほうが強かったのである。²⁷⁾ また旅人が裸同然の姿で歩いているのを書いた件でも、赤ん坊がいるのに蚊や蚤に悩まされていることを書いている件でも、淡々と事実を告げるだけで、日本の道徳や衛生状態に不満をぶつけるわけでも、それを異教のせいにするわけでもない。²⁸⁾ 余計な価値判断を加えていないだけに、少なくとも日本人読者にとっては好印象が残る。

ところで明治維新後、とりわけ文明開化の時代には宣教師のもとに士族階級を中心に社会の指導者が集ったわけであるが、幕末のこの時期、マーガレットが接した日本人は日本語教師や成仏寺詰めの幕府役人、使用人、食料を売りにくる行商人程度だった。中流階級以上の人々と知り合い、その信頼を得るのが重要だとは分かっている、まだその段階には至っていない。²⁹⁾ 彼女の知りうる範囲は庶民たちだった。ある村に立ち寄ったとき、“onna tojin” (女唐人)を見ようと集まってきた物見高い村人たちをマーガレットは次のようにリストアップしている。

At this place the entire population seems out to see us, from wrinkled old men and stout young clowns to hobbling old women and girls with red cheeks and laughing black eyes, and toddling children with babies nearly as big as themselves on their backs, whose little heads peeping over the shoulders of their bearers, give the appearance of the nurse being double-headed. In these villages, good nature and poverty seem to prevail; the old faces we see, are smoke-dried, wrinkled and toothless; backs are bent by heavy burdens, yet the face of youth is generally smiling and good-natured.

労働し齢を重ね皺の多い老人たち、働き盛りの壮年者たち、赤いほっぺたの娘たち、子供がさらに幼い子供をおんぶした顔が2つの子供たち、老若男女いずれも貧しく素朴な人びとだった。³⁰⁾

身近な日本人として卵売りのお婆さんについてマーガレットは書いている。お婆さんは若い時分、役者だったので周りを楽しませてくれる。マーガレットが病気の時に子守を頼んだこともあって、子供は彼女にとりもなついていた。社交的なので、バイブル・ウーマンに相応しいのではと考えて、宗教の話をしてみると、あまりにもこちらの話に同意するので、本当に理解しているのかどうか疑問に感じてしまうとマーガレットは語っている。お婆さんは自宅が寒いと言ってはバラ家のストーブにあたりに来ていたというが、日本人とどのような交際があったのか参考になろう。³¹⁾

日本女性についてはお決まりのトピッカーお齒黒、衣装、髪形が並ぶ。日本女性の社会的地位は高いとマーガレットは考えていたようだ。主に庶民階級の女性たちを観察した結果なのかもしれないが、日本の女性たちは比較的自由であるとマーガレットは次のように指摘する。

I am surprised and pleased to find the Japanese accord to their women so large a

measure of respect and considerate care. She is almost as much at liberty to walk and visit as in our own land. Indeed, any amount of social freedom prevails among womankind here. After the meals are cooked and the home made tidy, a woman is at liberty to go where she will and gossip with whom she likes, over the hibachi, and tea-tray sitting near.

日本女性はアメリカの女性と同様に歩くことができるし、社会的な自由がかなり認められている。食事の支度をし、家を片付けさえすれば、世間話をしに出かけてもかまわない。マーガレットによれば、日本の歴史において120人の天皇のうち9人は女性がその地位を占めたこと、日本神話の主要な神が女性であること、そして日本文学を発展させたのも女性であったことも、女性の地位の高さを示す証左であった。³²⁾

些細な理由で男性が妻を離縁できることや、たとえ一般的ではないとはいえ一夫多妻が許されていることは指摘するのだが、アメリカの夫婦像と重ねるかのように、家庭における女性の役割を以下のように説明している。

I have seen enough to know that she can and does generally rule her own household; and she considers it her duty and privilege to share whatever of pain or sorrow is appointed to man, but I am sorry to say, the man is not always as faithful to her, being at liberty to divorce her for a very slight cause. Polygamy is practiced, though it is not universal.

家庭を切り盛りし、夫の苦しみや悲しみを共有する妻がここでは描かれているのである。さらに15歳の日本の少女は“bright, intelligent, interesting, modest, ladylike and self-reliant”であり、彼女らは両親への従順、結婚後は夫とその両親への、とりわけ姑への従順を教え込まれる。生

まれながらの愛情、優しさ、忍耐という点において、日本の母親はその他の国々と母親と同様だと解説されている。³³⁾

意外にも、これらの説明は日本女性とアメリカ女性の相違よりも類似点を強調している。マーガレットの描く日本女性の姿は肯定的なもので、これは主として庶民生活を観察したことに起因するのかもしれない。その後、多様な階層の人びととの出会いによって、この見解に変更があったのかどうかは不明である。³⁴⁾ いずれこの時点では、マーガレットは男性社会の頸木の下で虐げられた可哀相な異教の女性というパターンとは異なる女性像を提示したのである。

この本は子供についても詳しい。1862年5月5日の手紙で、マーガレットはこいのぼりを話題にあげ、あわせて雛祭りも紹介している。その他にも年中行事や季節の遊びを解説する。はねつき、凧揚げ、独楽まわし、囲碁、将棋、双六など様々な遊びが取り上げられている。お正月に大人たちが子供たちと一緒に遊んでいる姿をジュリア・カロザースも紹介しているが、日本には子供相手に商売する人たちがいて「赤ちゃん天国」と呼ばれるのも不思議ではないとマーガレットも語っている。³⁵⁾

総じて日本人は幸福な民族であるとマーガレットは考えていたようだ。日本の葬儀とお盆の風習を解説した箇所、日本人は死を長く嘆くことはない」と指摘し、次のように解説する。

Their seeming incapacity for conceiving sorrow is one of the most characteristic features of this people. Perhaps this in due to the influences amidst which this free and happy people have the privilege of living. As some one has said, "Where nature is always bright and beautiful, the inhabitants, like the scenery, seem to expand under its influence, and to become bright and happy". Such is the case with these people, who while yielding almost unconsciously to these influences, deepen

them by their eager pursuit of all things gay and handsome.

自然の恵みが豊かであるがゆえ、人びとは無意識に楽しいこと、見た目に美しいものを追求するというのであるが、マーガレットは日本人には精神的な真剣さが欠落しているように思われた。そしてそれを補い、精神性と道徳性をもたらすのはキリスト教に他ならないと考えていたのである。³⁶⁾

マーガレットが本書で取り上げた話題は豊富である。それらは個人的な観察の結果や他の宣教師たちからの伝聞だったろう。あるいは1860年代前半というこの時期、日本関係図書がどれほど存在したのか分らないが、先人の文献を参照したこともあろう。³⁷⁾ おそらくマーガレットは自分の感性を信じて好みを語り、可能な限りアンテナを延ばして情報を入手し、思考している。ワンパターンになりがちな宣教師たちの日本論のなかで、本書は異彩を放つ。その面白さはマーガレットの好奇心の賜物だったといえる。

後年、日本にしばらく滞在し、日本人の価値観や生活習慣に一定の理解を示し、文明の意味するところが分からなくなったと告白するアメリカ人が現れた。W.E.グリフィスやアリス・ベーコンがそれである。彼らはともに出版を意識して書き、日本についての語り部となった。³⁸⁾ マーガレットの本からは彼らともまた異なった印象を受ける。若い感性が直感的な印象をそのままに語っているような気がする。

6. 横浜への移転問題

周囲の人たちとの人間関係にも恵まれ、マーガレットは伝道開始前の準備期間とも呼ぶべきこの時期を、宣教師夫人として順当に過ごしていた。幸いにも日本という国も気に入っていたようだ。しかし彼女が生活していたのは幕末動乱期の日本であり、外交上の、政治上の混乱から、神奈川から横浜への転居を余儀なくされたとき不満が噴出した。

日米修好通商条約では神奈川が開港場に指定されていた。しかし幕府は東海道の主要な宿場町の

一つである神奈川に外国人が入り込み、大名行列とぶつかるなどの無用な混乱や事故が起こるのを危惧し、横浜に居留地を造成し、こちらを開港場とした。すでに神奈川に居住していた外国人に対して居留地への移転命令がだされた。成仏寺の宣教師一団も移動しなければならなくなる。この間の日米の外交交渉にバラ夫妻は一喜一憂させられた。結局は他の外国人たちと同様に横浜に転居せざるをえなかったのだが、マーガレットには幕府役人に対する不信感と、外部的な理由によって住み慣れた環境から強制的に引き離されたという大きな不満が残った。

横浜への移動の必要は前もって知らされていた。³⁹⁾ それゆえヘボンは自己資金で居留地に土地を買って家を新築し、1863年1月には新居に移っていた。ところがオランダ改革派伝道協会は資金を欠き、安い時機に土地を購入しておく余裕がなかった。またブラウン夫妻と同様に、バラ夫妻は成仏寺では近所の人たちとの交流も深まっていたのに、ここを去るのは布教の機会をみすみす逃すことになると考えていた。成仏寺に住み続ける意思を幕府側に示すために、あえて古寺の改築に着手しようとしていた。だが江戸のアメ리카公使館が焼き討ちに遭うに至って、浪人たちから外国人を守るという名目で、急遽、真夜中に移転が強行された。この時には幕府の役人ばかりでなく、アメリカ公使、領事、海兵隊までもが動員されており、マーガレットは公使や領事が幕府の言いなりになっていると苦々しく感じた。この大騒ぎはまったく茶番劇だったと彼女はヘジラ（イスラムの遷都）に例えて、“Whenever I think of our 'he-gira' from Kanagawa, I have to laugh. It was so ludicrous and such a farce.”と語る。⁴⁰⁾ さらに悪いことには、横浜には転居先が確保されていなかった。バラの家族はまずヘボン宅に身を寄せた。その後、アメリカ領事館で“our *dirty* little rooms”をあてがってもらったものの、泥棒に入られてしまう。そこで神奈川に戻ることを画策するが、果たせなかった。落ち着かない生活がしばらく続いた。これはブラウン一家も同様で、かれらは13ヶ月間、住まいを転々とした。⁴¹⁾ その後、居留地に

一区画を入手し、ブラウン一家と半分ずつ使用することになった。

この間の出来事を語るマーガレット語調は以前の手紙とは異なり、悲観的である。幕府側からすれば、開国した以上、外国人を保護できなければ面子が保てない。しかしマーガレットたちの言い分によれば、神奈川に居住する権利は条約で保障されていた。さらに運河に囲まれた横浜は補給路を絶つのが容易で、火を放たれれば援軍が到着する前に焼け落ちてしまうような、危険な場所に思われた。自国の外交官たちへの不満も大きかったが、日本の役人批判には次のように歯に衣を着せない厳しさがある。

How deceitfully the Government has behaved toward us; but what could we expect [sic] from a people whose policy is anything but straightforward. They are ever ready with a thousand crooked arguments, for not giving a direct answer to a direct demand, and in our case, have descended to base subterfuges to cover this cowardly act.

幕府は正直さを欠き、平気で人を欺く。そして卑劣な行為を隠すために、言い逃れをすると述べる。⁴²⁾

やっと落ち着いた先の居住環境は必ずしも快適なものではなかった。人通りが多くて、騒がしく、不潔で悪臭に満ちている。しかし家の中は快適で、ここが私たちのホームだと語る。“...still I can call it an oasis in the wilderness of discouragement, because it is our *home*, and in it we are helped so wonderfully by our Heavenly Father to bear our trials.”そしてマーガレットらしく不満を並べるのを堪えて、時代は好転しており、日本の青年たちに英語を教える可能性がでてきたことを告げている。⁴³⁾ しかしこれ以降、マーガレットはさらに不満を募らせ、最終的に一時帰国するに至る。

7. 国際政治への関心

横浜移転問題を機に噴出したマーガレットの不満は、外交上の混乱が私生活に墨を及ぼした結果、生じた怒りに他ならなかった。その批判は主として幕府および幕府役人に対して向けられた。マーガレットは一方で、より広い視野から日本の政治と日本をめぐる国際関係にも言及しており、それは常に最新情報だった。日米関係や日本国内の政治対立が、日常生活に直結していたのであり、それだけにニュースに敏感にならざるをえなかった。日本滞在が長くなるにつれ、マーガレットの政治理解も深化した。1864年には、朝も昼も夜も食事の時の話題は暗殺、砲撃、地方大名の裏切りだが、これらを通して分かってきたことがある、と彼女は次のように告げている。

We have for breakfast, dinner and supper, reports of assassinations, bombardments, or treacherous action of some native prince, and are beginning to get our eyes open to the fact that foreigners are not the only cause of all these overturnings, but that the country was ripe for revolution before any treaties were made with foreigners.

日本の内乱は条約問題だけが争点だったわけではなく、革命の機運は以前から存在していたのであり、条約問題は幕府批判に格好の口実となったことを知ったのである。⁴⁴⁾ さらに日本政治における天皇と将軍による二重支配構造が判明すると、連鎖的に、彼女は以下のことを理解していった。日本の主権者は天皇であり、将軍に外国と条約を結ぶ権限はなかった。しかし成り行き上、開国を断行した幕府は、実権を保持するためにも外国人を守ろうとする。(横浜への移動を強要した幕府は外国人を孤立させようとしていたのではなく、むしろ守ろうとしていたことに、マーガレットはようやく気づいた。) 列強は条約締結相手を間違えてしまったわけであるが、攘夷派(浪人)から自国の日本在留民を守るために幕府に味方する。浪

人たちは、外国人を追い出そうとすると同時に、勅許を得ずに条約を締結した幕府を転覆しようとしている。列強が幕府の味方をするのを天皇は快くは思っていない。しかし天皇が開国政策を支持する可能性もある。

幕末維新期の政治は複雑でマクロな構図は後の時代によく把握できる。しかしマーガレットは横浜で発行された新聞を読んで、状況を自分なりに分析・理解していったようだ。井伊直弼暗殺や外国人殺し、公使館焼討ちはすべて浪人の仕業であるといわれているが、背後には何か大きな力が働いているはずだ。だが真の首謀者は時間が経たないと判明しないものだ、と次のようにマーガレットは冷静なコメントしている。

All this the ronin were said to have accomplished, though doubtless a stronger power was backing them up. You know, it is not till after the lapse of years that one can always see clearly the prime mover in events with which they have been contemporary. At the time, the ostensible agent is the one usually regarded as the one most responsible, though he may be but a mere link in the official machinery. ⁴⁵⁾

マーガレットは幕末期の日本をめぐる国際関係も注意深く見守っていた。1860年代に入ると、日本に開国を迫ったアメリカは南北戦争のせいか、その影響力を弱め、イギリスが西洋列強の代表者として台頭してきた。彼女はその変化を見逃さなかった。港に最も多くの軍艦を装備している国こそが、貿易上も政治的にも最も優位にあるというのが彼女のコメントである。また国際社会の進展において、デビューしたばかりの弱小国に西洋列強が様々な難癖をつけて賠償金を請求していることに苦言を呈する。イギリスは生麦事件では幕府に10万ポンド、薩摩藩に25万ポンドの賠償金を要求し、薩英戦争では鹿児島を攻撃した。これは外国勢力の軍事的優位を島津藩に見せつける効果

はあったかもしれないが、その道義的責任はどうかと次のように疑義を正す。

But what of its moral effect? What encouragement and cheer does it give to those men who are struggling so hard to elevate their nation and make it equal to the so-called Christian nations, when they exact such things at such a time? Truly the men who authorized these vengeful acts seem to think there is no Day of Judgement. To oppress and take advantage of a weak nation, struggling in the throes of revolution as this is, shows not only weakness, but cowardice. Such covetousness would be unpardonable were it not, that the act was bitterly denounced by Parliament and the press at home.

イギリス議会やイギリスの新聞が黙っているからといって、許されるものだろうかと問う。イギリスだけではなく、アメリカも批判されるべきだとマーガレットは続ける。というのも下関砲撃事件ではアメリカ、イギリス、フランス、オランダが組して300万ポンドの賠償金を請求し、山分けしたからである。西洋列強の干渉を受けながらも、かろうじて独立を保とうとして必死な努力をしているアジアの小国にこのようなやり方で賠償金を要求することが許されるのであろうかと批判している。⁴⁶⁾

政情不安な時代背景の反映かもしれないが、政治・国際関係への関心は本書のもう一つの特徴である。マーガレットは政権が不安定だっただけに、情勢分析を怠らなかったのであろう。

おわりに

幕末から明治初期にアメリカ女性が書いた日本論は、職業的旅行家によるものと宣教師によるものの2種類に大別される。前者は視覚的な印象を言葉で写し取ろうとしたがゆえ、⁴⁷⁾ 著者の本当の思いが伝わってこないもどかしさが残る。一方、

女性宣教師たちの著作には西洋文明・キリスト教至上主義的な偏見が露わである。本書は本来、後者に範疇分けされるべき文献であるが、それにしでは意外に宣教師的偏見が少なく、著者の素直な印象が記されている。しかもマーガレットはかなり知的レベルが高く、自分自身で観察・思考・判断しているのが独自で、これが本書の魅力となっている。さらに滞在時期が幕末動乱期と重なっているがゆえ、日本の国内政治から国際関係にいたるまで広範な話題が展開しているという点においても本書の内容は興味深い。

註

- 1) 戸田徹子「カロザース夫人の『日出づる国』」『山梨国際研究 (山梨県立大学国際政策学部紀要)』1 (2006年3月)、31-40。
- 2) Margaret T. Ballagh, *Glimpses of Old Japan 1861-1866* (Tokyo: Methodist Publishing House, 1908). 日本語訳も出版されている。マーガレット・バラ著、川久保とくお訳『古き日本の瞥見』(有隣堂、1992)。
- 3) 以下、バラ夫妻の伝記的情報については主として次の2点を参照した。小林功芳「ジェームズ・バラーキリスト教日本伝道の開拓者」『科学/人間 (関東学院大学工学部)』13(1984年)、38-47。秋山繁雄『明治人物拾遺物語ーキリスト教の系譜ー』(新教出版社、1982年)、40-44。
- 4) 高谷道男・太田愛人『横浜バンド史話』(築地書館、1981)、121-126。
- 5) 望月洋子『ヘボンの生涯と日本語』(新潮社、1987)、98。川島二郎『ジョナサン・ゴープル研究』(新教出版社、1988)、140-141。
- 6) Ballagh, "Preface."
- 7) Ballagh, 9, 60, 82.
- 8) Ballagh, 52, 115.
- 9) 高谷道男編訳『ヘボンの手紙 (増補版)』(有隣堂、1982)、67, 70。
- 10) 高谷道男『ドクトル・ヘボン』(牧野書店、1954)、116-117、121-124。望月、96-97。
- 11) Ballagh, 83. 例外としてゴープル夫妻が他の宣教師家族と聖餐式をともにしなかったことがあげられるが、これは人間関係の対立ではなく、教派の違いから生じたと考えられる。高谷道男編訳『ヘボン書簡集』(岩波書店、1959)、41。しかしながら後に、バラは超教派伝道の是非をめぐって、教派別伝道を主張するヘボンと対立をきたす。バラ夫妻とゴープル夫妻は年が近いこともあって、とりわけ仲がよかったと思われるが、金銭トラブルで対立し裁判沙汰になっている。詳細に

- については、川島「ゴープル対バラの米国領事裁判」『ジョナサン・ゴープル研究』、131-210を参照してほしい。成仏寺の住人ではなかったものの、フルベッキともバラは対立した模様である。フルベッキはオランダ改革派外国伝道協会主事、J.M.フェリス宛ての手紙(1872年2月24日)で、彼の活躍ぶりを妬んでバラとヴィーダーが夫人たちと一緒にあって自分の妨害をしていると訴えている。高谷道男『フルベッキ書簡集』(新教出版社、1978)、209。
- 12) Ballagh, 44. 高谷によれば、二人は見合い結婚であった。『横浜バンド史話』、124-125。川久保「訳者あとがき」『古き日本の瞥見』、185。
 - 13) Ballagh, 58-59.
 - 14) Ballagh, 39-41.
 - 15) Ballagh, 81-82, 88. 宣教師夫人の仕事に際限がないことは、ヘボンも指摘するところである。『ヘボン書簡集』、14、40。
 - 16) Ballagh, 97-99.
 - 17) Ballagh, title page.
 - 18) 小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師』(東京大学出版会、1992)、189-212。
 - 19) Ballagh, 26-27.
 - 20) Ballagh, 24-25, 28.
 - 21) Ballagh, 83.
 - 22) Ballagh, 25, 34, 42.
 - 23) Ballagh, 87.
 - 24) Ballagh, 96-97.
 - 25) Ballagh, 48-49.
 - 26) Ballagh, 53.
 - 27) Ballagh, 83-84. 『ヘボン書簡集』、15、330。
 - 28) Ballagh, 62, 76-77.
 - 29) Ballagh, 83.
 - 30) Ballagh, 49.
 - 31) Ballagh, 100.
 - 32) Ballagh, 85-86.
 - 33) Ballagh, 86-87.
 - 34) 1865年には進歩的で有能な日本政府関係者の自宅に招待され、結婚の話を聴いている。Ballagh, 119-122.
 - 35) Ballagh, 69; Julia D. Carrothers, *The Sunrise Kingdom* (Philadelphia: Presbyterian Board of Publication, 1879), 114-119, 295-296.
 - 36) Ballagh, 54-55, 62.
 - 37) オールコットの名前に言及していることから、少なくとも Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon* (1863) を読んだ可能性はある。
 - 38) アリス・ベーコン、久野明子訳『華族女学校教師の見た明治社会の内側』(中央公論社、1994)、177。W. E. グリフィス、山下英一訳『明治日本体験記』(平凡社、1984)、439-440。
 - 39) 『ヘボン書簡集』、8-10。
 - 40) Ballagh, 105-106.
 - 41) Ballagh, 107. W.E.グリフィス、渡辺省三訳『われに百の命あらば』(キリスト新聞社、1985)、147。
 - 42) Ballagh, 104.
 - 43) Ballagh, 109.
 - 44) Ballagh, 113.
 - 45) Ballagh, 116-117.
 - 46) Ballagh, 114-115.
 - 47) 佐伯彰一、芳賀徹編『外国人による日本論の名著』(中央公論社、1987)、48。